

岐阜県文化財保護センター
調査報告書 第137集

開拓地B地点遺跡

2016

岐阜県文化財保護センター

かい　　たく　　ち　　ち　　てん
開 拓 地 B 地 点 遺 跡

2016

岐阜県文化財保護センター

序

高山市は、季節により緑や紅に装いを変える木々と、山間を縫うように流れ下る清流によって育まれた、美しく豊かな自然の中にはあります。中でも開拓地B地点遺跡が所在する高山市高根町の日和田高原は、標高1,000mを超える高地にあり、南方に御嶽山、北方に乗鞍岳の雄姿を眺めることができます。

このたび、岐阜県飛騨農林事務所による平成27年度県営中山間地域総合整備事業の集落道開拓線拡幅工事に伴い、開拓地B地点遺跡の発掘調査を実施しました。当遺跡からは、以前に実施した発掘調査において旧石器時代の石器類や縄文土器の出土が報告されており、旧石器時代からの人々の営みが確認されている地域です。今回の調査では、長野県諏訪エリア産と推定される黒曜石を用いたナイフ形石器など旧石器時代を中心とする石器類18点と土坑2基を発見しました。県境の長峰峠を越えた長野県の開田高原一帯には旧石器時代の遺跡が点在しております、両地域の関連をうかがわせる当時の人や物の移動に関わる貴重な資料を得ることができました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援と御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成28年10月

岐阜県文化財保護センター
所長 羽田 能崇

例　言

- 1 本書は、岐阜県高山市高根町に所在する開拓地B地点遺跡（岐阜県遺跡番号 21203-00731）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、平成 27 年度県営中山間地域総合整備事業南高山地区に伴うもので、岐阜県飛騨農林事務所から岐阜県教育委員会が依頼を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘作業及び整理等作業は平成 27 年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は大宮次郎、三島誠、小林新平が行い、それぞれの執筆箇所は目次に示した。なお編集は大宮が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量などの支援業務と、出土遺物の洗浄、整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、橋本技術株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 黒曜石製石器の産地推定は、株式会社パレオ・ラボに委託して行い、その結果は第 4 章に掲載した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である（敬称略・五十音順）。
- 岩田崇、大石崇史、長屋幸二、吉朝則富、留之原町内会、高山市教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2007『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経緯	(三島)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の方法と経過		3
第2章 遺跡の環境	(小林)	5
第1節 地理的環境		5
第2節 歴史的環境		7
第3章 調査の成果		9
第1節 遺跡の基本層序	(三島)	9
第2節 遺構・遺物の概要	(大宮)	12
第3節 遺構	(大宮)	12
発掘区全図・分割図		
第4節 遺物	(大宮)	17
遺構・遺物観察表		
第4章 自然科学分析	(大宮)	21
第1節 黒曜石製石器の産地推定		21
第5章 総括	(大宮)	25
第1節 層位の検討		25
第2節 遺物及び遺物分布		26
第3節 遺跡の検討		26
参考文献		28
写真図版		
報告書抄録		

挿図目次

図 1 遺跡位置図	1	図 12 発掘区全城図分割図 1	14
図 2 発掘区位置図	2	図 13 発掘区全城図分割図 2	15
図 3 試掘・確認調査坑位置図	2	図 14 発掘区全城図分割図 3	16
図 4 発掘区地区割り図	3	図 15 遺物実測図	18
図 5 遺跡周辺の地形	5	図 16 遺物出土位置図	19
図 6 周辺地質図	6	図 17 黒曜石産地分布図(東日本)	21
図 7 周辺の遺跡分布	8	図 18 黒曜石産地推定判別図 1	23
図 8 発掘区北壁土層断面図(1)	10	図 19 黒曜石産地推定判別図 2	23
図 9 発掘区北壁土層断面図(2)	11	図 20 今回の発掘区と千葉大学発掘区の位置図	25
図 10 SK 1・2実測図	13	図 21 下呂石等の石材獲得推定ルート	27
図 11 発掘区全城図割付図	13		

表目次

表 1 周辺の遺跡一覧	8	表 9 石器観察表	20
表 2 出土遺物一覧表	12	表 10 分析対象石器一覧表	21
表 3 遺構観察表	20	表 11 東日本黒曜石産地の判別群	22
表 4 ナイフ形石器観察表	20	表 12 測定値及び産地推定結果	24
表 5 石刃観察表	20	表 13 千葉大学調査(1989年)と 今回の調査の基本層序の対比表	25
表 6 RF観察表	20	表 14 旧石器時代遺跡の石器石材比率	27
表 7 剥片観察表	20		
表 8 石核観察表	20		

挿入写真目次

写真 1 遺物包含層掘削作業風景 ······ 4 写真 2 遺物包含層の土の篭がけ作業風景 ··· 4

写真図版目次

図版 1 発掘区遠景	調査前風景近景	図版 2 出土遺物
発掘区北壁土層断面	発掘区完堀状況	
遺物出土状況	III層スコリア出土状況	
SK 1 完堀状況	SK 2 完堀状況	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

開拓地B地点遺跡は、岐阜県北部、高山市高根町留之原字鎌柄原に所在する（図1）。

今回の発掘調査は、岐阜県農政部飛騨農林事務所（以下、「事務所」という。）による県営中山間地域総合整備事業の集落道開拓線拡幅工事に伴い実施したものである。この事業は、農業用・生活用・トレーニング施設用といった幅広い用途に供するため、道路の拡幅を行い、利便性を向上させることを目的として計画された。事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地「開拓地B地点遺跡」（岐阜県遺跡番号21203-00731）が所在することから、事業に先立ち岐阜県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）は平成26年7月1日から3日にかけて試掘・確認調査を実施した。調査の結果、遺構を確認することはできなかったが、一部の試掘・確認調査坑からナイフ形石器が出土し、遺物包含層が残存することが確認された。同年8月28日に平成26年度第1回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会（以下、「検討会」という。）が開催された。検討会では発掘調査における適切な本発掘調査・方法について検討し、岐阜県発掘調査適用基準に基づき、旧石器時代の遺跡が密集する地域であるという特性を考慮し、TP5周辺の134m²の本発掘調査が必要との意見がまとめられた（図2・3）。その後、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、事務所長から県教育委員会教育長あて発掘の通知（平成26年8月11日付け飛農林第1285号）が提出され、同法第94条第4項の規定に基づき、県教育委員会教育長は事務所長あて勧告（平成26年9月11日付け社文第44号の73）がなされた。事務所長は県教育委員会教育長に発掘調査の実施を依頼した。それを受け岐阜県文化財保護センター（以下、「センター」という。）は、調査着手後文化財保護法第99条の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査着手の報告（平成27年5月12日付け文財セ第78号）を県教育委員会教育長に提出した。



図1 遺跡位置図（平成元年国土地理院発行1:50,000地形図「木曾福島」）

2 第1章 調査の経緯

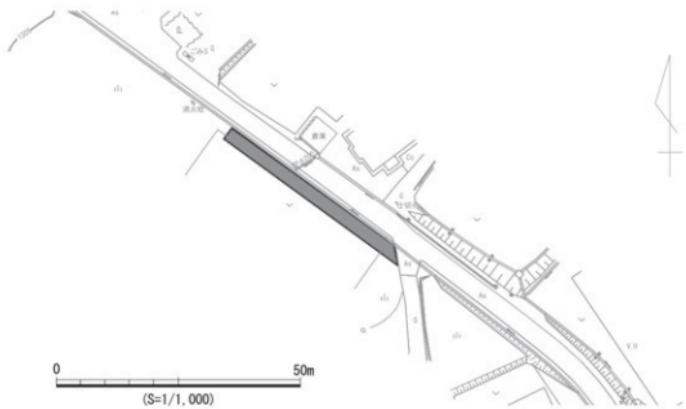


図2 発掘区位置図

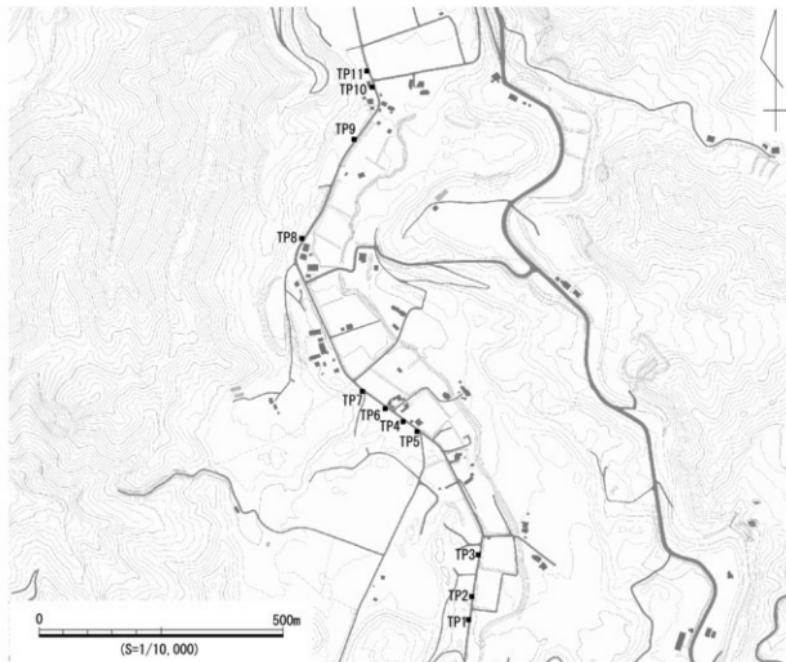


図3 試掘・確認調査坑位置図

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘調査は、平成27年度に134 m²を対象に実施した。

グリッドの設定は、世界測地系を基に $(X, Y) = (-2,000, 32,400)$ を原点として 100m×100m 四方の大グリッドを設定した。さらに、大グリッド内に 5m×5m の小グリッド（以下、「グリッド」という。）を設定し、北から南へ L から R、西から東へ 1 から 8 を設定した（図4）。例えば、今回の発掘区の北西隅グリッドの呼称は L 1 となる。

調査対象地は、調査前は畑地として利用されていた場所である。試掘・確認調査では、TP 5 で地表面の約 0.2m 下に遺物包含層を確認していたことから、調査初めに発掘区の北西隅に排水用を兼ねて坑を掘削し、地表面からの遺物包含層の位置の確認及び土層観察を行った。

基本層序は、試掘・確認調査及び発掘区壁面の土層の検討結果をもとに I 層から V 層を設定した。I 層を表土、II 層を畑耕作により土壤が攪拌された層、III 層を遺物包含層とし、IV 層上面（IV 層が残らない場合は V 層上面）を遺構検出面とした。II 層は、黒色土（II a 層）とにぶい褐色土（II b 層）からなる。調査当初、II b 層を遺物包含層として掘削したが、発掘区壁面の土層の検討結果から畑耕作により土壤が攪拌された層と判断し、II 层に含めた。

表土掘削はバックホウによる重機掘削を行い、II b 層・III 層の掘削、遺構検出、遺構掘削はジョレン・移植ゴテなどを用いて人力で行った。II b 層・III 層は、石器や石器製作で生じた石核・剥片・碎片など小さな遺物を含む可能性があったため、グリッドを四分割し、その土を土嚢袋で管理し、乾燥後に篩がけ作業を行い、遺物の確認作業を実施した。篩がけ作業に使用する篩い目の開は 3 段階とし、最小の篩い目の開は、石器の碎片まで採集できるように 2.5 mm のものを使用した。縫については発掘作業時に被熱の有無を確認し、配石・礫群を想定しながら作業を行った。最後に IV 層に遺物が含まれるかを確認するために、IV 層が堆積した部分に 7 箇所のトレチを設定し、人力掘削による補足調査を実施し、終了した。

個別の遺構実測図の作成は、三次元測量・図化システムによって行ったが、遺構断面図・発掘区壁面土層図は手測りで実測した。掘削作業時に出土した遺物については、原位置を三次元座標により取得し、取り上げた。

出土品の一次整理作業はセンター飛騨駐在事務所で実施した。

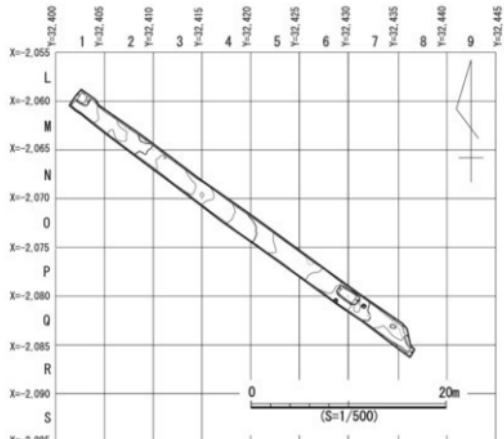


図4 発掘区地区割り図

4 第1章 調査の経緯

2 発掘作業の経過

第1週（5/11～5/15）11日に表土掘削・グリッド設定を行った。同日、II a層中から石鏃1点（報告書掲載番号10）を確認した。12日にII b層を確認し、掘削を開始した。13日にII b層掘削土の篭いがけ作業を開始した。14日にII b層掘削中に石核1点（報告書掲載番号8）、同週のII b層掘削土の篭いがけ作業中にナイフ形石器1点（報告書掲載番号1）、石刃1点（報告書掲載番号4）を確認した。

第2週（5/18～5/22）18日にII b層掘削を終了し、III層の掘削を開始した。

第3週（5/25～5/29）III層の掘削を継続して行った。

第4週（6/1～6/5）1日に関高等学校教諭長屋幸二氏による出土した石器の指導を受けた。4日にIII層の掘削を終了した。5日に遺構検出作業を行った。

第5週（6/8～6/12）8日に遺構掘削作業を行い、同日に終了した。同日に発掘区の全景写真撮影を行った。11日に下層（IV層）に遺物がないか確認するためのトレンチを7箇所設定し、補足調査を行った。12日に全体図校正作業を行った。

第6週（6/15～6/19）15日に篭いがけ作業を終了した。

第7～8週（6/22～6/29）22日に重機による発掘区の埋め戻し作業を行い、同日に終了した。23日に事業主である事務所の担当者とともに現地確認を行い、現地引渡しを行った。29日に一次整理を開始し、同日に終了した。

8月には発掘作業で出土した黒曜石製石器2点の产地推定を委託し、12月4日に納品を受けた。



写真1 遺物包含層掘削作業風景



写真2 遺物包含層の土の篭いがけ作業風景

3 整理等作業の経過

整理等作業はセンター飛騨駐在事務所において平成27年7月から平成28年3月まで実施した。

4 調査体制

発掘作業及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長

宮田敏光

総務課長

二宮隆

調査課長

成瀬正勝

調査担当係長

大宮次郎

担当調査員

大宮次郎 三島誠

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

当遺跡が立地する高山市高根町は、飛騨地方南東部の岐阜県と長野県の県境に位置する。北には乗鞍岳、南には御嶽山があり、町域の約97%を山林が占める。また、標高1,000m以上の土地が町内の約95%を占める極めて高地に位置する町である。高根町は南北にある二つの活火山に挟まれているため、約40,000～50,000年前の新生代に起きた噴火による溶岩台地が発達しており、同町内では火山の噴火活動によって形成された地勢を見ることができる。開拓地B地点遺跡の所在する日和田高原も、御嶽山の噴火に伴う溶岩によって形成された台地である。また、これら二つの火山山頂を中心とした一帯では放射状に新しい谷が形成されており、中小河川が流れている。さらに、高根町の東には飛騨山脈南端に位置する鎌ヶ峰があり、同町中央部には鎌ヶ峰を下る河川の古くからの侵食作用によって深い峡谷が作られている。峡谷を流れる河川は火山によって形成された中小河川を束ねた後に南西へと流れ、飛騨川となって下呂市金山において馬瀬川と合流する。このように、高根町の地勢は鎌ヶ峰をはじめとする古い山々とそれらを流れる河川の侵食作用によって形成された峡谷、そして乗鞍岳と御嶽山による新しい火山地形が複合して成立した地勢である¹⁾。

火山の影響によ



図5 遺跡周辺の地形

(平成25年国土地理院発行1:200,000地形図「高山」「飯田」)

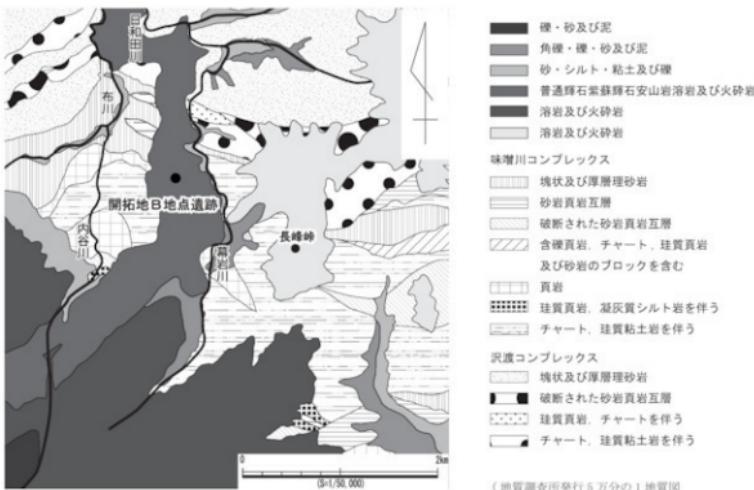


図 6 周辺地質図

って形成された地勢のため、町内の地質は複雑な様相を呈している。遺跡の立地する日和田高原は安山岩を基盤とする新しい地質であるが、日和田高原周辺の本来の地質は中・古生代に形成されたものであり、岐阜県内において広範に分布する美濃帯堆積岩コンプレックスの中でも味噌川コンプレックスと沢渡コンプレックスと呼ばれる地質帶にあたる。沢渡コンプレックスは日和田高原の北に分布し、砂岩や頁岩、チャート等からなる。長野県の安曇野市から高根町にかけて広く分布している。一方、味噌川コンプレックスは日和田高原の東西に分布し、砂岩や頁岩を主体として部分的にチャートや珪質頁岩などを含む^{2) 3)}。とくに、日和田高原を挟む東西には味噌川コンプレックスの中でも珪質粘土岩を伴うチャートを含む地質帶があり、遺跡の傍を流れる幕岩川や布川ではチャートの転石を拾うことができる。

また、高根村の地理的条件は、東西文化交流の仲介点としての機能を備えていた。なかでも、開拓地B地点遺跡のすぐ東には長野県との県境となる長峰峠があり、古くからヒトやモノの通る道としての役割を果たしてきた。旧石器・繩文時代から長野県の文化との関わりがあることが判明しているほか、江戸時代には街道の経路上にあったことがわかっている⁴⁾。

注

- 1) 高根村 1984 「第一編 第一章 地勢」『高根村史』
- 2) 高根村 1984 「第一編 第二章 地質」『高根村史』
- 3) 竹内誠・大塚勉 1998 「III. 美濃帯堆積岩コンプレックス」『地域地質研究報告 木曾福島地域の地質』
- 4) 高根村 1984 「第二編 第二章 高根村の繩文時代」『高根村史』

第2節 歴史的環境

開拓地B地点遺跡が立地する日和田高原の一帯には遺跡が分布している。しかし、発掘調査によってその内容が把握されている遺跡はほぼなく、そのほとんどが表探資料による報告である。そのため、表探資料をもとにした記述が中心となるが、本節では当遺跡の周辺に所在する旧石器・縄文時代の遺跡について概観する。なお、図6及び表1は、『高根村史』及び遺跡管理GISを元に、遺跡名・遺跡の範囲などに関する新たな成果を踏まえて作成した。

旧石器時代の遺跡としては、開拓地A～C地点遺跡（1～3）、開拓地角石平遺跡（10）、槍柄原遺跡（11）がある。今回の発掘区にも含まれる開拓地A～C地点遺跡（1～3）からはナイフ形石器や木葉形尖頭器、細石刃、細石刃核、スクレイバー等が採集されている。石器の石材には黒曜石や下呂石、チャート等が用いられている。ナイフ形石器は石刃を用いたものや厚手で幅広の剥片を用いた切出形のものなどがあり、その形態は一様ではない¹⁾。また、細石刃核は楔形を呈しており、削片系の細石刃技法の特徴を示す²⁾。これは、長野県の柳又遺跡A地点における細石刃石器と類似した傾向を示しているとされる³⁾。開拓地角石平遺跡（10）は、開拓地B地点遺跡の西方に位置する。下呂石製の錐様石器、頁岩製の搔器、チャートの削器、細石刃核などが採集されている。槍柄原遺跡（11）においても若干の遺物が採集されており、黒曜石製のナイフ形石器、半面加工の尖頭器、チャート製の細石核などが認められる⁴⁾。

縄文時代の遺跡としては、日和田遺跡（4）、角石平遺跡（8）、下幕岩岩陰遺跡（9）、槍柄原遺跡（11）、留之原遺跡（13）があげられる。槍柄原遺跡（11）からは縄文土器、磨石、削器、打製石鏃などが出土している。砂岩製の磨石を除けば、出土した石器のほとんどは下呂石製である。土器は縄文時代早期の押型文土器が出土している。下幕岩岩陰遺跡（9）からは縄文時代早期後葉に属する上ノ山式土器が出土している。土器は採石場の岩場の隙間に据えられており、ほぼ完形で遺存していた。角石平遺跡（8）からは、縄文土器片、磨製石斧、打製石鏃などが多数採集されている。土器片は縄文時代早～中期のものが出土しており、中期に属するものが多いとされるが、詳細は不明である。ほかにも、日和田遺跡（4）と留之原遺跡（13）からは打製石鏃、石匙が表探されているものの、土器が共伴しないため詳細な時期等は不明である⁵⁾。

注

- 1) 井上善六・小嶋準一・吉朝則富・永塚俊司 2001 「岐阜県高根村日和田池ノ原遺跡群の報告（その1）」『飛騨と考古学 旧石器特集号』
- 2) 井上善六・小嶋準一・吉朝則富・永塚俊司 2005 「岐阜県高根村日和田池ノ原遺跡群の報告（その2）」『石器に学ぶ』8
- 3) 國學院大學文学部考古学研究室 1990 「第Ⅱ章 第3節 開田高原の遺跡」『柳又遺跡A地点 第1次発掘調査報告書』
- 4) 高根村 1984 「第二編 第一章 高根村の先土器時代」『高根村史』
- 5) 高根村 1984 「第二編 第二章 高根村の縄文時代」『高根村史』

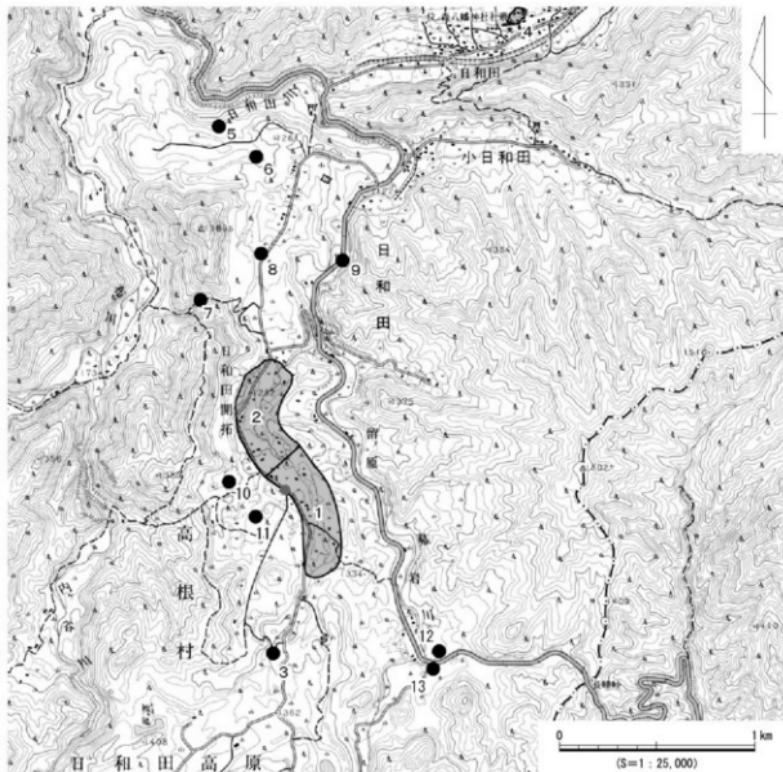


図7 周辺の遺跡分布（昭和63年国土地理院発行1:25,000地形図「木曽西野」）

表1 周辺の遺跡一覧

遺跡名	時代	種別	遺跡名	時代	種別
1 開拓地B地点遺跡	旧石器・繩文	散布地	8 角石平遺跡	繩文	散布地
2 開拓地A地点遺跡	旧石器・繩文	散布地	9 下幕岩岩陰遺跡	繩文	散布地
3 開拓地C地点遺跡	旧石器・繩文	散布地	10 開拓地角石平遺跡	旧石器	散布地
4 日和田遺跡	繩文	散布地	11 槍柄原遺跡	旧石器・繩文	散布地
5 留ノ原A地点遺跡	繩文	散布地	12 池ノ原遺跡	繩文	散布地
6 留ノ原B地点遺跡	繩文	散布地	13 留之原遺跡	繩文	散布地
7 留ノ原C地点遺跡	繩文	散布地			

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の基本層序

発掘作業前の発掘区の土地利用状況は、畑地及び、舗装道路に面した畑地に入るための未舗装の作業道であった。地表面は、土地区画などによる段差ではなくほぼ平坦で、南東から北西にかけて緩やかに低くなっていた。

基本層序は、1989年に千葉大学が実施した発掘調査（飛騨考古学会旧石器分科会・永塚 2001）と対比しながら、試掘・確認調査及び発掘区壁面の検討結果をもとに、I層からV層を設定した。なお、今回の発掘調査の基本層序と千葉大学が実施した発掘調査の基本層序との対応関係については、第5章総括で詳述するため、ここでは、簡単に述べる。

I層は表土・整地土層である。発掘調査では、aからd層に細分し、a層を表土層、bからd層を整地土層とした。I層の最下層I d層は、昭和49年に軽舗装整備された開拓地線から畑に入るために設置された作業道の整地土層と考えられる。このI d層の上にI b層を確認したが、I b層は上面が現在の舗装道路の傾斜に合うように発掘区の南東側ほど厚く堆積することから、舗装された道路の南東側から畑地に入るために、南東から北西方向にむかって緩やかに下降する地形に造成した整地土層と考えられる。発掘区の南東隅では、整地土層（I c層）がI d層を切るように堆積していた。この整地土層（I c層）の掘削中に発掘区外南側から水が滲み出し、溜まる現象がみられた。現況地形からみると、発掘区外の南側約20mに湧水池が点在することから、もともと発掘区内には窪地状の地形があり、その部分を整地した可能性がある。

II層は、畑の耕作により土壤が攪拌された層である。層相により、a・bに細分した。II a層は、旧表土層である。しまりのない黒色土で、発掘区のほぼ全面で確認することができた。発掘調査では石鏃・RF・石核が出土した。千葉大学が実施した発掘調査の1 a層（黒ボク土）に対応する。II b層は、にぶい黄褐色の粘性のある土にIII・IV層を起源とする褐色土がブロック状に多く混じる層である。発掘区のほぼ全面で確認できた。発掘調査ではナイフ形石器・石刃・RF・剥片・石核・焼礫が出土した。調査当初は遺物包含層として掘削したが、発掘区壁面の土層を観察し検討した結果、II b層とIII層の層界は漸移的ではなく、明瞭に区分できることから、遺物包含層が畑の耕作により土壤の攪拌を受けて形成された層とした。II b層は、千葉大学が実施した発掘調査の遺物包含層（1 b層及び2 a層）が耕作により攪拌された層と考えられる。

III層は、褐色の粘性のある土層である。ややしまりのある土で、部分的にII層の土壤が斑状に入る。試掘・確認調査では、III層の土壤の篩がけを行い、ナイフ形石器1点が出土したことから遺物包含層とした。発掘調査ではRF・剥片が出土した。III層中にII層の土壤が斑状に入ることについて、発掘区壁面の土層を観察し検討した結果、植物の根痕やモグラ穴などの作用による可能性が高いことが分かった。植物の痕跡は畑の畝に沿った部分に多く、これを裏付ける。千葉大学が実施した発掘調査の2 a層に対応する。

10 第3章 調査の成果

IV層は、褐色の粘性のある土層で、II・III層の土が混じらない。発掘区北壁付近で確認することができた。IV層の堆積範囲は、調査前は畑地の作業道として利用されていた部分とほぼ合致するため、

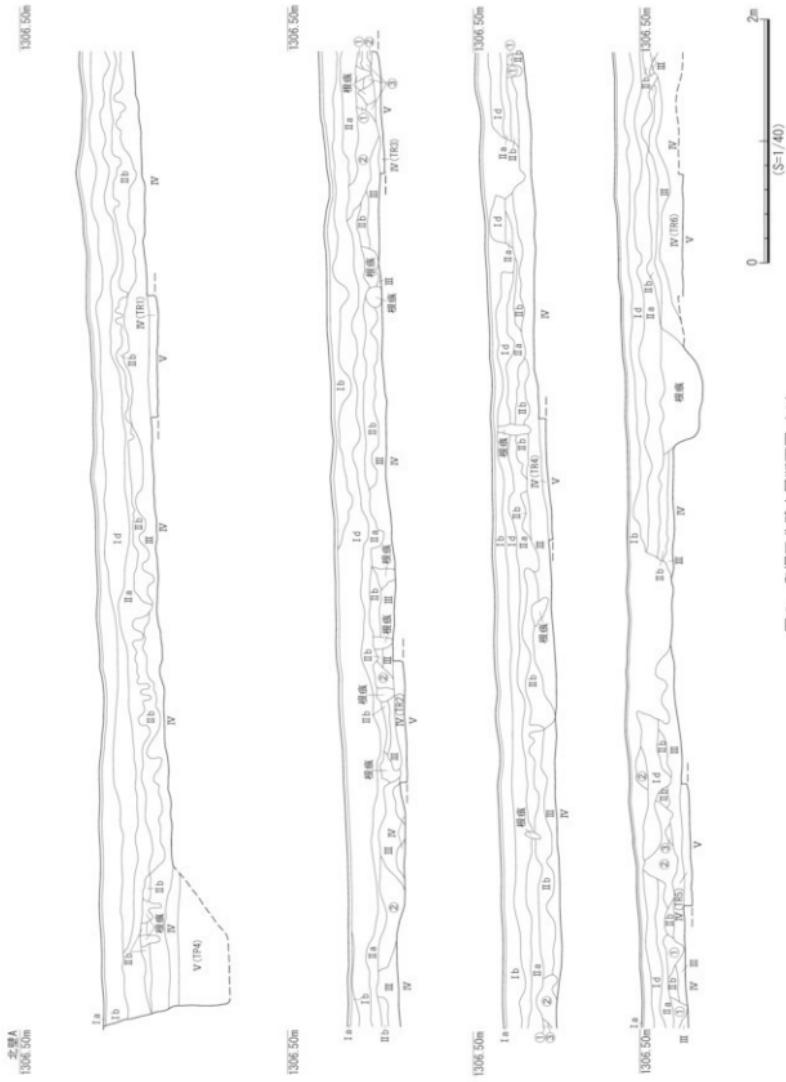


図8 発掘区北壁土層断面図（1）

IV層は、畑の耕作による土壌の攪拌をあまり受けていない層と理解できる。調査終盤で、IV層中に遺物が含まれていないか確認するために補足調査を行ったが、遺物は確認できなかった。千葉大学が実施した発掘調査の2a層に対応する。

V層は、しまりのある黄褐色の土層である。発掘区の南壁面付近と北壁面に設置したTP1から7で確認することができたことから、発掘区全体に存在すると考えられる。千葉大学が実施した発掘調査の2b層に対応する。

遺構検出は、IV層上面を基本とし、IV層が残存しない部分についてはV層上面で行った。

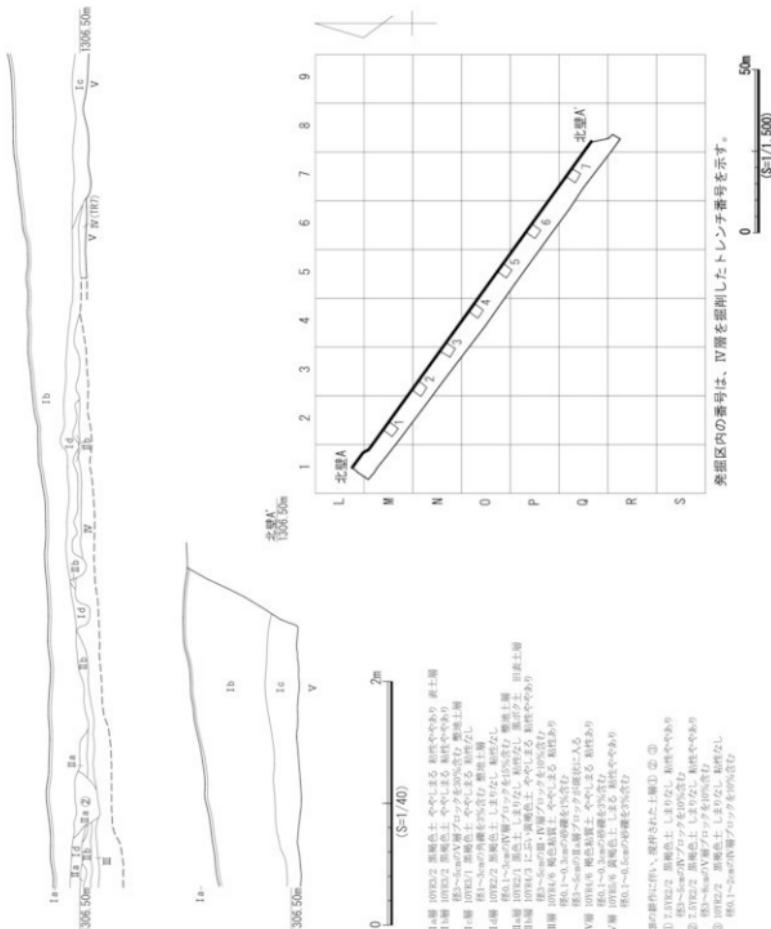


図9 発掘区北壁土層断面図 (2)

第2節 遺構・遺物の概要

1 遺構の概要

今回の調査で確認した遺構は、土坑(S K) 2基である。土坑とは人為的に掘られた穴のうち、柱穴・溝等の性格が特定できなかつた遺構であり、報告に当たり新たに遺構の通番(遺構番号)を与えた。各々の遺構の位置や規模、遺構の詳細については、本章第3節及び遺構観察表(表3)に掲載した。なお、焼磧1点をN 2グリッドII b層で検出している。磧は磨滅した円磧で、破断面がみられる。石材は砂岩で被熱している部分が明赤褐色に変化しているが、破断面は被熱していない。1点のみ出土のため礫群として扱わない。

2 出土遺物の概要

今回の調査では、旧石器時代から縄文時代にかけての石器類18点が出土した。微細な遺物が多く、籠がけによって採取した遺物が13点で、デジタル測量によって出土位置を測定しているのは5点である。出土遺物の種別及び石材については、出土遺物一覧表(表2)に掲載し、遺物の詳細については本章第4節に記載した。なお、平成26年の試掘・確認調査時に発掘区内の試掘坑(T P 5)から出土したナイフ形石器1点、R F 1点、剥片1点についても本書にて報告する。

本書で報告する石器類の分類については、以下のとおりである。

ナイフ形石器 刀器などの剥片に刃つぶし剥離を加え、現在のナイフに似た形状に仕上げた石器。

石刃 石刃技法によって作出された側縁に刃部を有する継長の剥片石器。

R F 素材剥片の縁辺の一部に二次加工を施すもの。

剥片 剥離作業によって生じた剥片のうち、二次加工や微細な剥離痕が確認できなかつたもの。

石核 素材剥片を剥離した残核。

石鎚 鋭利な先端部と柄に装着するための基部を打ち欠きによって作出した小型の石器。

表2 出土遺物一覧表

石材	器種	ナイフ形石器	石刃	R F	剥片	石核	石鎚	合計
チャート		1	1	6	8	2	0	18
黒曜石		1	1	0	0	0	1	3
合計		2	2	6	8	2	1	21

第3節 遺構

1 SK

S K 1 (図10)

発掘区南東部のQ 7グリッドに位置し、IV層上面で検出した。上端の標高値は約1306.4mである。規模は長軸0.42m、短軸0.39m、深さ0.23mを測る。断面形状は2段の掘り込みがみられ、平面・底面形状は、ともに円形である。埋土は単層で、しまりのある暗褐色土にV層ブロック土を少量含む。柱痕跡等の柱穴と判断できる土層は、確認できなかつた。遺構埋土からの出土遺物はなく、遺構の時期は特定できない。

SK 2 (図10)

発掘区南東部のQ 6 グリッドに位置し、IV層上面で検出した。上端の標高値は約 1306.3mである。規模は 0.34m、短軸 0.29m、深さ 0.10mを測る。断面形状は逆台形を呈しており、平面・底面形状は、ともに円形である。埋土は単層で、しまりのある暗褐色土にV層ブロック土を多く含み、炭化粒を少し含む。柱痕跡等の柱穴と判断できる土層は確認できなかった。SK 1と同じく遺構埋土からの出土遺物はなく、遺構の時期は特定できない。

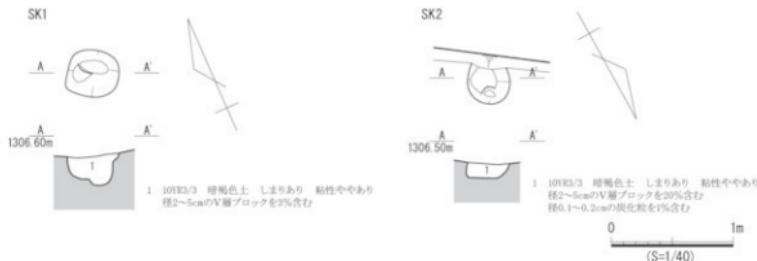


図10 SK 1・2実測図

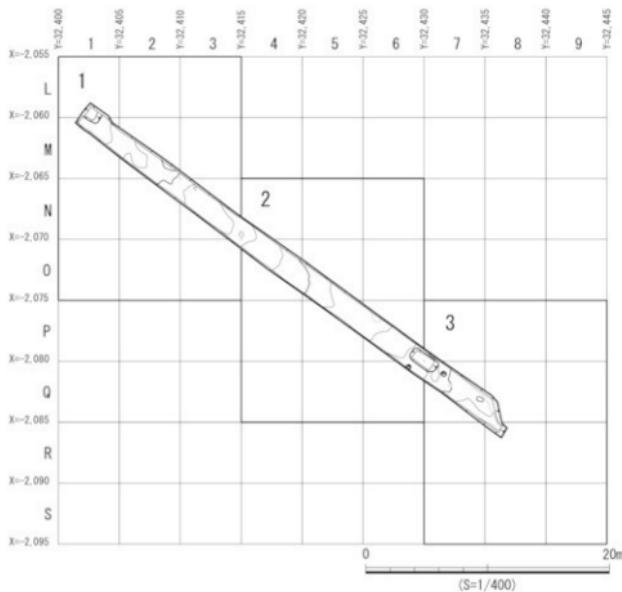


図11 発掘区全域図割付図

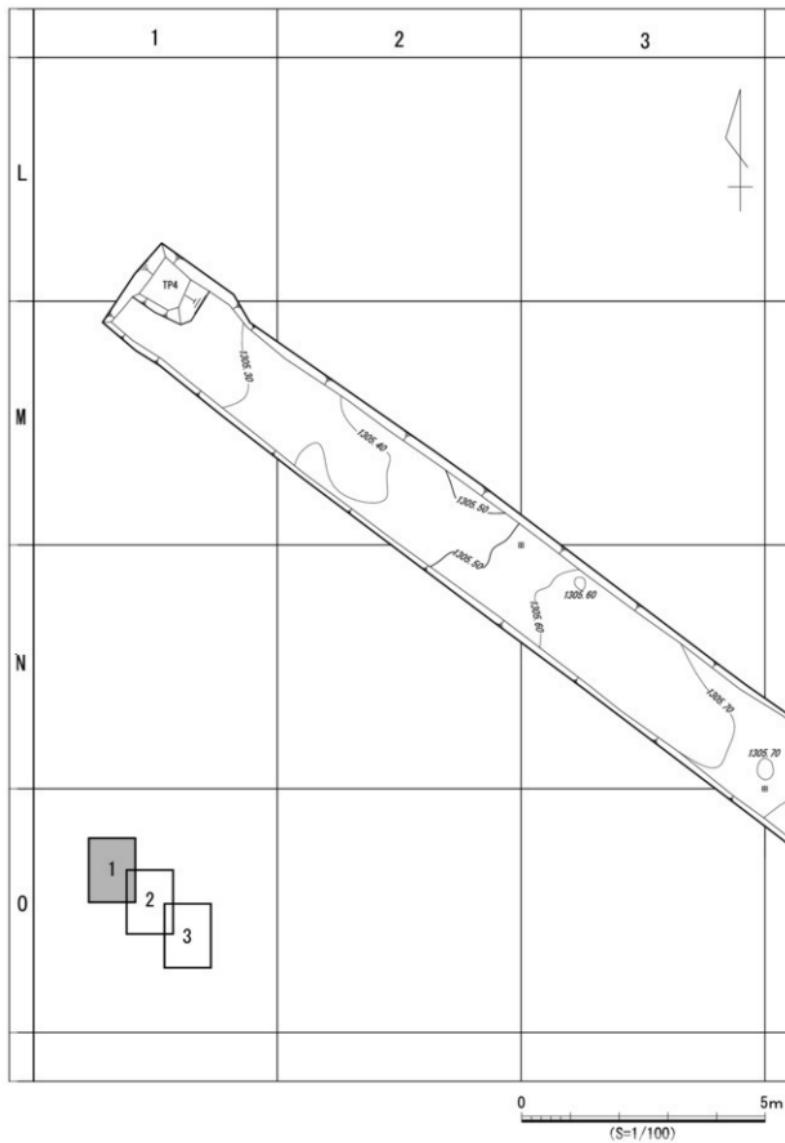


図 12 発掘区全域図分割図 1

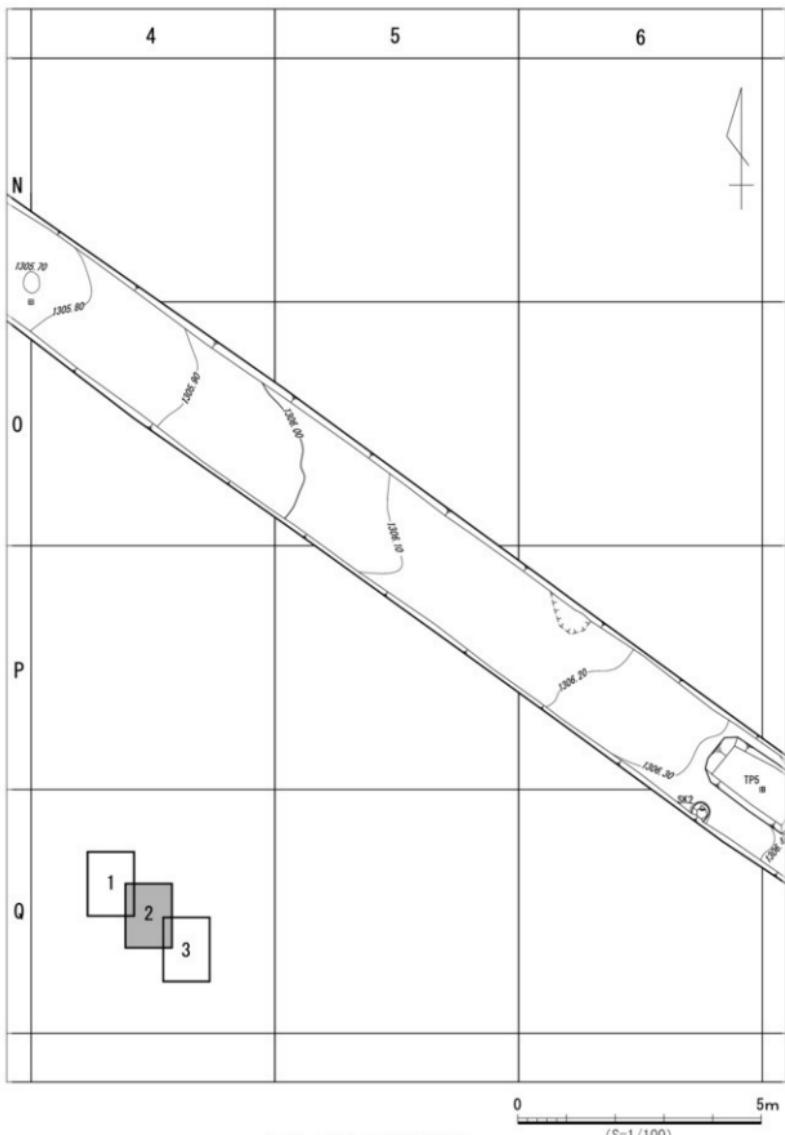


図 13 発掘区全図分割図 2

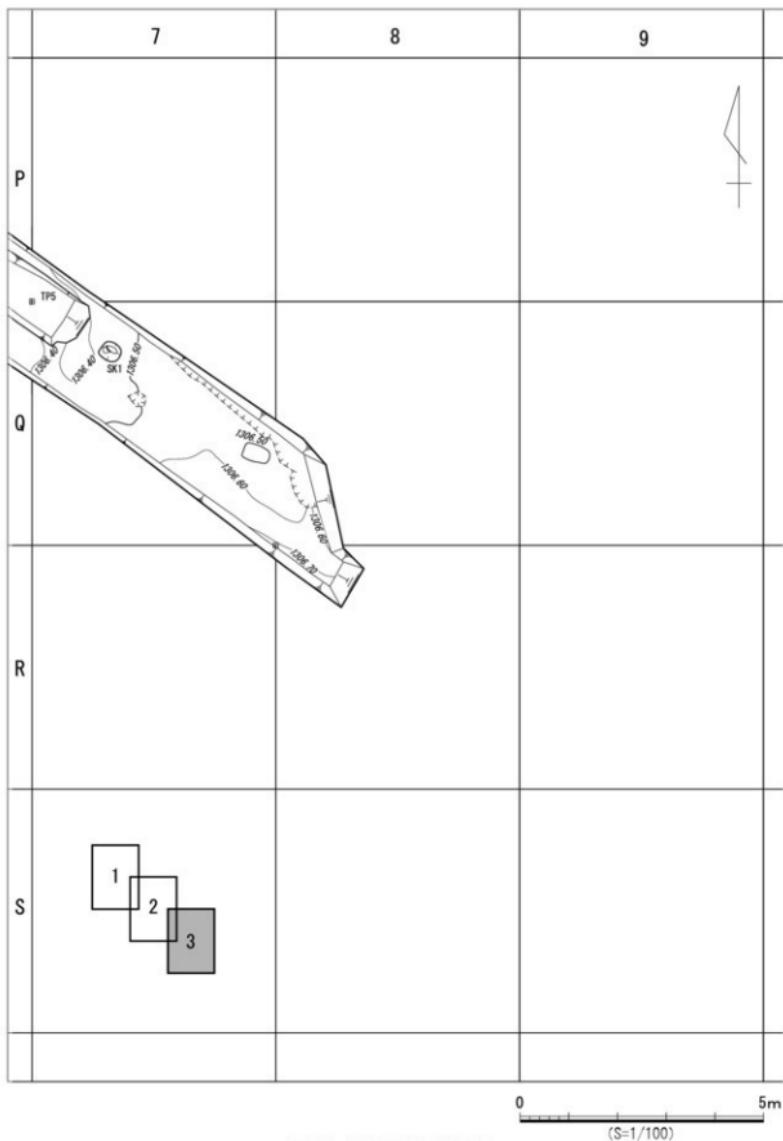


図 14 発掘区全域図分割図 3

第4節 遺物

今回の調査で出土した18点の石器類のうち8点と、平成26年度の試掘・確認調査時に出土した2点を実測図で掲載した（図15）。図示した遺物の様相を器種ごとに記述する。

1 ナイフ形石器

ナイフ形石器は2点出土した。1はQ8グリッド、IIb層掘削土の箇がけ作業で確認した。左側縁は直線的、右側縁はやや弧を描く縦長剥片を素材とし、両側縁にプランディング加工が施されている。また、腹面に平坦剥離が認められる。先端部は欠損しており側縁刃部の残存長は1.8cmである。石材は黒曜石で、エネルギー分散型蛍光X線分析による産地推定を行った結果、産地は長野県の星ヶ台群に推定された（産地推定結果は、第4章第1節に記載）。2は平成26年度の試掘・確認調査時に試掘坑TP5の4層（今回の調査の基本層序III層に対応）掘削土の箇がけ作業で確認した。縦長剥片を素材とし、両側縁にプランディング加工が施されている。基部にも調整が見られる。先端部は欠損しており側縁刃部の残存長は1.9cmである。石材はチャートである。

2 石刃

石刃は2点出土した。3はQ8グリッド、IIb層掘削土の箇がけ作業で確認した。上下両端を切断した縦長剥片の石刃で、背面の稜が側縁に並行して走る。右側縁の一部に節理面が見られる。側縁の加工は施されていない。石材はチャートである。4はQ8グリッド、IIb層掘削土の箇がけ作業で確認した。縦長剥片を素材とし、背面の稜が側縁に並行して走る。両側縁部に微細な刃こぼれがあり、右側縁に自然面が見られる。石材は黒曜石で、エネルギー分散型蛍光X線分析による産地推定を行った結果、産地は長野県の星ヶ台群に推定された（産地推定結果は、第4章第1節に記載）。

3 RF

RFは6点出土した。5はQ7グリッド、IIa層から出土した。不定形な剥片を素材とし、両側縁部に二次加工があり微細な刃こぼれもみられる。先端部に節理面が残存する。石材はチャートである。6は平成26年度の試掘・確認調査時に試掘坑TP5の4層掘削土の箇がけ作業で確認した。縦長剥片を素材としており、右側縁に二次加工が見られる。背部等に節理面が確認できる。石材はチャートである。

4 剥片

剥片は8点出土した。7はP6グリッド、III層から出土した。平坦面を打面とした縦長剥片である。石材はチャートである。

5 石核

石核は2点出土した。8はQ7グリッド、IIb層から出土した。平坦な面を打面としながら作業面を転移する石核で、打面1面と作業面4面が確認できる。剥離痕から3cm程度の剥片が作出されたと考えられる。節理面が2面みられる。石材はチャートである。9はQ7グリッド、IIa層から出土した。平坦な面を打面としながら作業面を転移する石核で、打面が1面、作業面が2面確認できる。剥離痕から1.5cm程度の剥片が作出されたと考えられる。右側縁には自然面が残存しており、左側縁には細かい剥離がみられる。石材はチャートである。

6 石鎚

石鎚は1点出土した。10はP 6グリッド、II a層から出土した。調整剥離が全体にあるため素材となる剥片の形状は不明である。欠損部ではなく、先端部の角度は 60° を測る。基部は側縁を整形後に抉りを入れている。また、側縁中央部が屈曲し先端部が細くなる形状から、先端側の側縁部に再度加工し直した可能性がある。石材は黒曜石である。



図15 遺物実測図

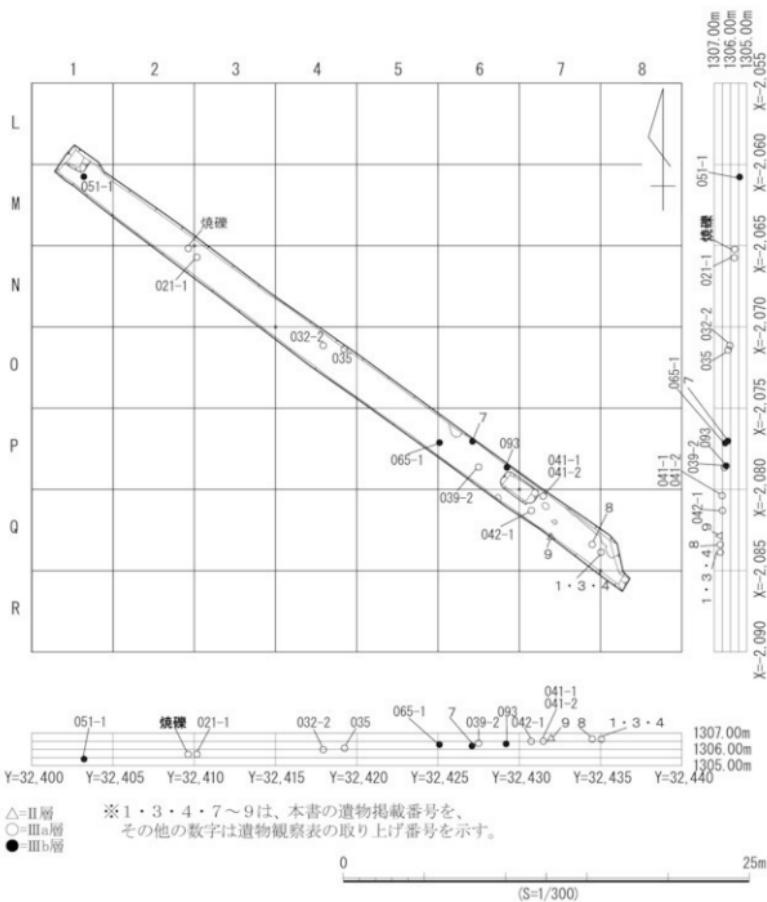


図 16 遺物出土位置図

0  5cm
(S=1/2)

20 第3章 調査の成果

表3 造構観察表

造構番号	調査時 番号	地区名	検出面	重複 状況	断面形状	平面形状	底面形状	規模 (m)			押因 番号	図版 番号	
								上端	下端	深さ			
S K 1	501	Q 7	IV層	單層	2段の組り込み	円形	円形	0.42	0.39	0.28	0.14	0.23	10 1
S K 2	505	Q 6	IV層	單層	逆台形	円形	円形	0.34	0.29	0.21	0.21	0.10	10 1

表4 ナイフ形石器観察表

掲載 番号	取り上げ 番号	出土 地区名	出土 層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	刀部		素材 形状	欠損状況	備考	押因 番号	図版 番号
									位置	長さ(cm)					
1	044-1	Q 8	II b	黒曜石	(2.0)	(1.1)	(0.5)	(0.8)	側縁	(1.8)	縱長	先端部欠損	急角度の剥離が、両側縁にあり。	15	2
2	134	T P 5	4	チャート	(2.2)	(1.3)	(0.6)	(2.4)	側縁	(1.9)	縱長	先端部欠損	基部に調整あり。	15	2

表5 石刃観察表

掲載 番号	取り上げ 番号	出土 地区名	出土 層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	刀部		素材 形状	欠損状況	備考	押因 番号	図版 番号
									位置	長さ(cm)					
3	044-6	Q 8	II b	チャート	(1.5)	(1.3)	(0.4)	(0.7)	側縁	(1.3)	縱長	欠損	片側縁に荒削面あり。	15	2
4	044-4	Q 8	II b	黒曜石	2.0	1.0	0.3	0.4	側縁	1.5	縱長	完形	両側縁に微細な刃こぼれあり。自然面あり。	15	2

表6 RF観察表

掲載 番号	取り上げ 番号	出土 地区名	出土 層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	調整		素材 形状	欠損状況	備考	押因 番号	図版 番号
									位置	長さ(cm)					
5	001-1	Q 7	II a	チャート	2.9	2.4	0.6	3.2	側縁	3.2	不定形	完形	両側縁に微細な刃こぼれあり。節理面あり。	15	2
6	136	T P 5	4	チャート	1.5	1.4	0.5	0.9	側縁	0.9	縱長	完形	片側縁に二次加工あり。節理面あり。	15	2
032-2	O 4	II b	チャート	1.0	0.8	0.5	0.4	不明	0.8	不明	完形	片側縁に二次加工あり。			
035	O 4	II b	チャート	3.6	2.3	1.4	13.2	側縁	2.2	縱長	完形	片側縁に二次加工あり。末端部に微細な剝離面あり。			
039-2	P 6	II b	チャート	1.6	0.9	0.6	1.1	側縁	1.5	縱長	完形	両側縁に二次加工あり。			
051-1	M 1	III	チャート	1.3	1.0	0.6	0.7	不明	0.6	不明	完形	両側縁に二次加工あり。			

表7 剥片観察表

掲載 番号	取り上げ 番号	出土 地区名	出土 層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	素材 形状	備考			押因 番号	図版 番号
										位置	長さ(cm)	備考		
7	091	P 6	III	チャート	2.1	1.5	0.4	1.0	縱長	平表面を打面とする。			15	2
021-1	N 3	II b	チャート	1.6	0.7	0.6	0.5	縱長	節理面を大きく残す。					
041-1	Q 7	II b	チャート	2.1	1.1	0.8	3.2	縱長	節理面を大きく残す。					
041-2	Q 7	II b	チャート	1.3	1.0	0.1	0.2	不明						
042-1	Q 7	II b	チャート	1.1	0.8	0.4	0.3	縱長						
065-1	P 6	III	チャート	1.0	0.8	0.1	0.2	縱長	腹面は抉れる。					
093	P 6	III	チャート	1.5	1.4	0.4	1.1	縱長	自然面あり。					
137	T P 5	4	チャート	1.8	1.4	0.3	0.8	縱長	平表面を打面とする。					

表8 石核観察表

掲載 番号	取り上げ 番号	出土 地区名	出土 層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	打面数	作業面数	備考			押因 番号	図版 番号
											欠損状況	先端角 (°)	備考		
8	047	Q 7	II a	チャート	3.7	3.0	2.6	27.7	1	4	節理面あり。			15	2
9	049	Q 7	II a	チャート	1.2	2.1	1.0	2.8	1	2	自然面あり。片側縁に細かい剥離あり。			15	2

表9 石鎧観察表

掲載 番号	取り上げ 番号	出土 地区名	出土 層位	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)	基部	側縁形状	欠損 状況	角度を 持つ	完形	先端側の側縁面に再加工	押因 番号	図版 番号
10	001-2	P 6	II a	黒曜石	1.6	1.5	0.3	0.3	抉り	角度を 持つ	完形	60	先端側の側縁面に再加工	15	2	

第4章 自然科学分析

第1節 黒曜石製石器の产地推定

1 はじめに

今回の発掘調査において、出土した石器類の中にナイフ形石器、石刃、石鎌の3点の黒曜石製石器が含まれていた。県境の長峰峠を越えた長野県側には開田高原が広がり、一帯に旧石器時代から縄文時代の遺跡が立地している。当遺跡と開田高原の遺跡との直線距離は約8kmと近く、当時の人や物の移動に関わる資料を得るために、旧石器時代の石器（ナイフ形石器、石刃）2点の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、产地の推定を行うことにした。分析は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

分析対象は、II b層より出土した旧石器時代の黒曜石製石器2点（掲載番号1、4）である（表10）。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。黒曜石の产地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石产地推定法である判別図法を用いた（望月1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その

表10 分析対象石器一覧表

分析番号	掲載番号	器種	出土層位	時期
1	1	ナイフ形石器	II b	旧石器時代
2	4	石刃		



図17 黒曜石产地分布図（東日本）

表11 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県(エリア)	判別群名	原石採取地
北海道	白滻1	赤石山山頂(43), 八号沢露頭(15)
	白滻2	7の沢川支流(2), 1K露頭(10), 9号沢露頭, 八号沢, 黒曜の沢, 梶加林道(36)
赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)
上士幌	上士幌	十勝三段(4), タウシュベツ川右岸(42), タウシュベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)
置戸山	置戸山	置戸山(5)
所山	所山	所山(5)
豊浦	豊浦	豊泉(10)
旭川	旭川	近文台(8), 雨沢台(2)
名寄	名寄	忠烈布川(19)
秩父別	秩父別1	社名瀬川河床(2)
秩父別	秩父別2	中山(66)
秩父別	秩父別3	
遠軽	遠軽	
生田原	生田原	仁田布川河床(10)
留辺蘗	留辺蘗1	ケショマップ川河床(9)
青森	留辺蘗2	
	飼路	飼路市営スキーリゾート(9), 阿寒川右岸(2), 阿寒川左岸(6)
木造	出来島	出来島海岸(15), 鶴ヶ坂(10)
深浦	八森山	八森山(7), 八森山公園(8)
青森	青森	天田内川(6)
秋田	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)
	脇本	脇本海岸(4)
岩手	北上折原1	
	北上折原2	北上川(9), 真城(33)
	北上折原3	
宮城	宮崎	湯ノ倉(40)
	色麻	根岸(40)
	仙台	秋保1(18)
山形	塩郷	塩郷(10)
	羽黒	月山(月山狂前(24), 大越沢(10))
新潟	鶴引	たらのき代(19)
	新発田	板山(10)
栃木	新津	金津(7)
	甘湯沢	甘湯沢(22)
長野	高原山	七尋沢(3), 宮川(3), 梓枝沢(3)
	西御屋	美琴バーライト土砂集積場(30)
	裏山	鷹山(14), 東御屋(54)
	小深沢	小深沢(42)
	土星橋1	土星橋西(10)
	土星橋2	新和田トンネル北(20), 土星橋北西(58), 土星橋西(1)
	古峰	和田峰トンネル上(28), 古峰(38), 和田峰スキーパーク(28)
	ブドウ沢	ブドウ沢(20)
	牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)
	高松沢	高松沢(19)
神奈川	諏訪	星ヶ台(35), 星ヶ塔(20)
	駿河	吉山(20), 芭草岡(20), 麦草岡東(20)
静岡	芦ノ湯	芦ノ湯(20)
	箱根	烟宿(51)
島根	駿河屋	駿河屋(20)
	上多賀	上多賀(20)
天城	柏原	柏原(20)
東京	恩施島	恩施島(27)
島根	神津島	砂稚崎(砂稚崎(20))
	久見	久見バーライト中(6), 久見採掘現場(5)
	宍道	宍道海岸(3), 加茂(4), 岸原(3)

測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps ; count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb 分率=Rb 強度×100/ (Rb 強度+Sr 強度+Y 強度+Zr 強度)
- 2) Sr 分率=Sr 強度×100/ (Rb 強度+Sr 強度+Y 強度+Zr 強度)
- 3) Mn 強度×100/Fe 強度
- 4) log (Fe 強度/K 強度)

そして、これらの指標値を用いた 2 つの判別図（横軸 Rb 分率-縦軸 Mn 強度×100/Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率-縦軸 log (Fe 強度/K 強度) の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、產地を推定する。この方法は、できる限り蛍光 X 線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log (Fe 強度/K 強度) の値が減少する（望月 1999）。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、產地推定の対象試料と同様の条件で測定した。表 11 に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点及び点数を、図 17 に各原石の採取地の分布図を示す。

3 分析結果

表 12 に石器の測定値及び算出した指標値を、図 18 と図 19 に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。なお、

図では視覚的にわかりやすくするために、各判別群を枠内で囲んである。

分析の結果、2 点とも星ヶ台群（長野県、諏訪エリア）の範囲にプロットされた。表 12 に、判別図法に

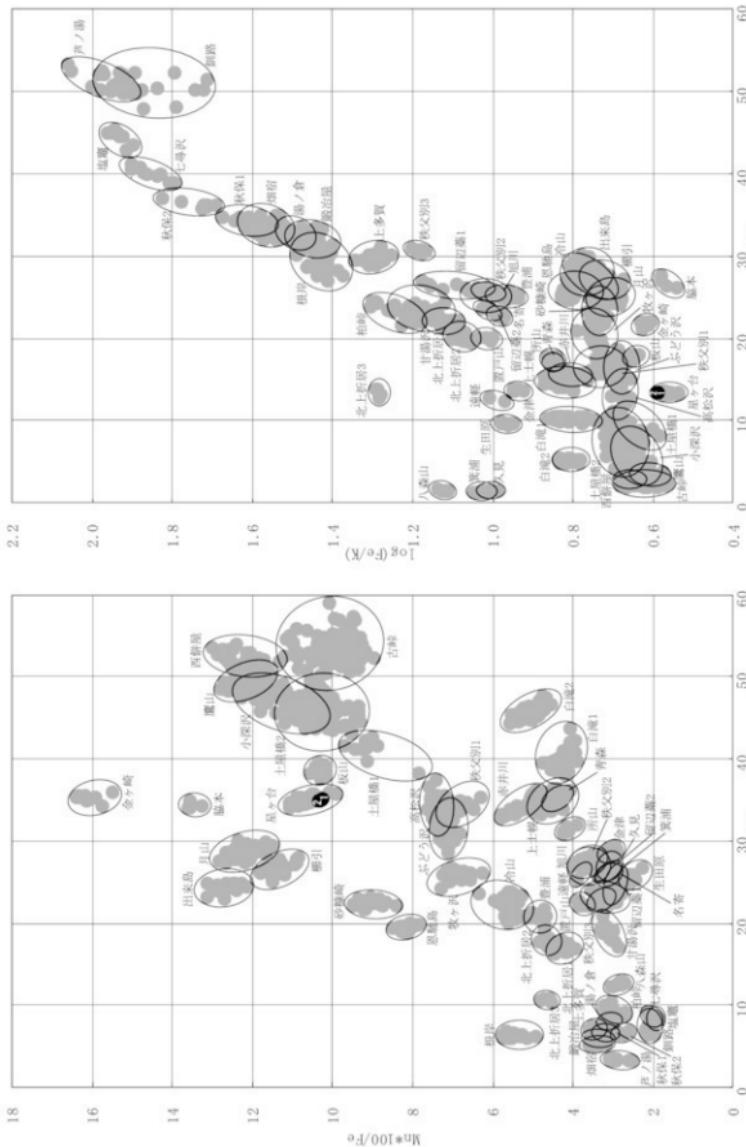


図18 黒曜石産地推定判別図 1

より推定された判別群名とエリア名を示す。

表12 測定値および産地推定結果

分析番号	掲載番号	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	$\frac{\text{Mn}}{\text{Fe}} \times 100$	Sr分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	判別群	エリア
1	1	285.0	112.9	1100.7	743.4	279.9	370.1	721.5	35.15	10.26	13.24	0.59	星ヶ台	諏訪
2	5	221.0	89.9	868.0	602.7	229.0	308.4	590.0	34.84	10.35	13.24	0.59	星ヶ台	諏訪

4 考察

当遺跡より出土した旧石器時代の黒曜石製石器2点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、2点とも諏訪エリア産と推定された。開田高原に所在する柳又遺跡A地点から出土した当該期の黒曜石製石器は、長野県の星ヶ塔や和田岬産である。柳又遺跡A地点出土石器の黒曜石産地推定のための分析¹⁾と今回の分析では方法が異なり、分析データから産地を比較することはできず、厳密には同産地であるとは言い難い。しかし、今回の諏訪エリアの分析判別群の「星ヶ台群」(原石採取地は星ヶ台、星ヶ塔)も柳又遺跡A地点の分析による産地の「星ヶ塔や和田岬」も長野県霧ヶ峰地区²⁾内であり、今回の分析結果から数kmの距離に位置する両遺跡共に、旧石器時代の石器石材として、遺跡に近い長野県霧ヶ峰地区的黒曜石が用いられていることが明らかになった。

注

1) 柳又遺跡A地区出土の黒曜石の産地推定のための分析は、熱中性子放射化分析法によって行われている。

2) 「霧ヶ峰地区」は、明治大学古文化財研究所の「蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定」の研究による原産地の地区割りの一つであり、判別群の星ヶ台と、産地の星ヶ塔、和田岬は全て「霧ヶ峰地区」内に含まれる。

参考文献

- 國學院大學文学部考古学研究室 1990『柳又遺跡A地点』(國學院大學文学部考古学実習報告 第19集)
- 明治大学古文化財研究所 2011『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定—基礎データ集<2>—』
- 望月明彦 1999「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2—上和田城山遺跡篇—』大和市教育委員会編 172-179、大和市教育委員会

第5章 総括

第1節 層位の検討

本節では、今回の発掘区における基本層序と、1989年に行われた千葉大学による学術目的の発掘調査の発掘区の基本層序を比較検討する。

千葉大学の発掘区は、今回の発掘区の約150m北方の開拓地A地点遺跡内の南部に位置する(図20)。この調査は、土地所有者により発掘区を中心に採集された細石刃石器群の遺物が「高根村史」において報告されたのをきっかけに「日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究¹⁾」の一環として行われた。調査ではナイフ形石器や細石刃など(微細な剥片を除く)約80点の旧石器時代の遺物が出土し、遺物包含層中に配石状の遺構を確認している。

基本層序は、発掘区南側の農道脇の耕地整備により露出した法面の土層と対比しながら1a層から6層まで設定している(表13)²⁾。遺物包含層は1b層から2a層上面に限られ、この層は耕作によりほとんど攪拌されていた。ナイフ形石器と細石刃が出土しているが、2時期の差は層位的には確認できていない。

今回の発掘区のIIa層は、黒色の旧表土層(旧耕作土層)であり、千葉大学発掘区の1a層に対応する。IIb層は畑の耕作により土壤の攪拌を受けた層で、遺物包含層のIII層ブロックを含む層相から、千葉大学発掘区の遺物包含層(1b層及び2a



図20 今回の発掘区と千葉大学発掘区の位置図

表13 千葉大学調査(1989年)と今回の調査の基本層序の対比表

千葉大学調査の基本層序			今回の調査の基本層序
1 a層	黒色 火山灰層	黒ボク土	I層 表土(1a層)、整地土層(1b~1d層)
1 b層	暗褐色風化 火山灰層	黒ボク土とローム層の漸移層 (遺物包含層の主体)	II層 旧表土 (畑耕作により攪拌された層)
2 a層	明褐色風化 火山灰層 (軟質)	ソフトローム層 (2a層上面が遺物包含層の主体)	
2 b層	明褐色風化 火山灰層 (硬質)	ハードローム層	III層 遺物包含層 IV層 遺物なし V層 ハードローム層
以下省略			以下未確認

層上面）に対比すると考えられる。千葉大学調査では、原位置から出土した遺物の大半が2a層上面に包含されるとしているが、2a層中からも遺物が出土していることからIII層は2a層に対応すると考えられる。また、千葉大学発掘区では細石刃が出土しているが、今回の発掘区では出土していない。

第2節 遺物及び遺物分布

本節では、今回の調査の遺物の特徴及び出土状況について、飛騨考古学会のこれまでの集成資料^③と比較し、その様相について簡潔にまとめる。

今回の発掘区から出土した2点のナイフ形石器は、小型のものである。石核（8）は、取り出された剥片は大きくとも3cm程度と考えられる。また、剥片は、概ね縦長剥片で背面の稜も側縁に平行であるものが多く、大きさもナイフ形石器とほぼ同サイズである。ただし、チップのような石器製作過程で生じるものがないことや、出土石器も少ないことから発掘区内で石器製作されたとは考え難い。

飛騨考古学会旧石器分科会が、地元住民の採集資料を対象とした調査や現地踏査から、開拓地A地点遺跡から開拓地B地点遺跡を中心に旧石器時代の遺物散布地を池ノ原遺跡群と呼称し、AからIの9地点を設定している（図20）。今回の発掘区は池ノ原遺跡群E・F地点に近接し、E地点ではナイフ形石器、石刃、尖頭器、細石刃等が、F地点ではナイフ形石器、細石刃等を採集している。E・F地点出土のナイフ形石器は、石刃（縦長剥片）を素材とせず、小型で比較的厚みのある剥片の打面側を尖頭部周辺にあて、両側縁あるいは片側縁に急角度調整を施しているという特徴がある^④。今回出土したナイフ形石器は縦長剥片を素材としており、E・F地点採集のナイフ形石器の特徴との違いが見られるが、ナイフ形石器の多様性の中で考えられる差異であり、小型のナイフ形石器という共通点から同時期のものであると考えられる^⑤。

今回の発掘区で出土した遺物の分布は、全21点のうち17点がE・F地点に近い発掘区南東部に集中する（図16）ことから、今回の発掘区はE・F地点の周縁部である可能性が考えられる。また、E・F地点よりやや低い位置にあることから、E・F地点から遺物が流れ込んだ可能性も考えられる。

第3節 遺跡の検討

本節では今回の発掘区及び、池ノ原遺跡群全体の石器石材比率（表14）を基に、遠隔地の石材（黒曜石・下呂石）の獲得ルートについて検討する。

池ノ原遺跡群の石器石材はチャートの比率が40.5%と最も多い。チャートの露頭は不明とされていたが、当センターの踏査によって、担当調査員が飛騨川支流の布川に良質なチャートの露頭を確認した。当遺跡出土のチャートの石器石材は、遺跡から比較的近い場所で採集された可能性が高い。

池ノ原遺跡群全体では、黒曜石製石器の比率は29.5%とチャートの次に高い。県内の旧石器時代遺跡の黒曜石製石器の比率は、飛騨市宮川町の宮ノ前遺跡で17.1%とやや高い比率を示すが、他の遺跡ではほとんど見られない。今回の発掘区で出土したナイフ形石器は、長野県柳又遺跡のナイフ形石器の文化層（柳又遺跡A地点第VIL文化期・柳又遺跡C地点第IV文化期）の時期の特徴をもつ^⑥が、今回の調査で出土した黒曜石製石器の産地推定結果は、柳又遺跡A地点の黒曜石と同様に長野県霧ヶ峰

地区であった。このことから、柳又遺跡を経由し、長峰峠を越える黒曜石獲得ルートが想定できる。

一方で、今回の調査では出土していないが、池之原遺跡群における湯ヶ峰由来の下呂石の比率は20.8%と一定量ある。また、柳又遺跡C地点第IV文化期では、下呂石製のナイフ型石器が出土しており、下呂石製石器類は29.8%と高い比率を示す。のことから、当遺跡を経由し、長峰峠を越える下呂石獲得ルートが想定できる。

また、池ノ原遺跡群から湯ヶ峰までは、向畠遺跡やひじ山遺跡を経る飛騨川沿いのルートや、西洞遺跡を経て鈴蘭高原を越える、御嶽山北側のルートも考えられる⁷⁾。

開拓地B地点遺跡は、標高1,000m以上の高所に位置しており、背後に



図21 下呂石等の石材獲得推定ルート

平成25年国土地理院発行1:200,000地形図「高山」「飯田」を縮小し作成

表14 旧石器時代遺跡の石器石材比率

遺跡名等	所在地	黒曜石		下呂石		チャート		その他	
		点数	割合	点数	割合	点数	割合	点数	割合
今回の発掘区 池ノ原遺跡群全体 (飛騨考古学会集資料)	高山市高根町	2点	10.0%	0点	0.0%	18点	90.0%	0点	0.0%
		78点	29.5%	55点	20.8%	107点	40.5%	24点	9.2%
		1点	10.0%	2点	20.0%	6点	60.0%	1点	10.0%
		3点	25.0%	0点	0.0%	8点	66.7%	1点	8.3%
		14点	29.2%	6点	12.5%	22点	45.8%	6点	12.5%
宮ノ前遺跡	飛騨市宮田町	47点	17.1%	69点	25.1%	76点	27.6%	83点	30.2%
大林遺跡	下呂市小川	0点	0.0%	1,858点	100.0%	0点	0.0%	0点	0.0%
柳又遺跡A地点第VIL文化層	長野県木曾町	320点	14.4%	39点	1.8%	1,840点	83.0%	17点	0.8%
柳又遺跡C地点第IV文化層		3点	6.4%	14点	29.8%	29点	61.7%	1点	2.1%

湿地が広がる湿原周辺の狩猟活動を示す遺跡⁸⁾であり、同時に長峰峠に近い交通の要衝に位置した遺跡といえる。

第5章 注

- 1) 麻生優 1991「岐阜県・池の原遺跡の調査概要」『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』
- 2) 2 b 層の下の風化火山灰層（3層から6層）は、調査面の下層のため、本文中の記述と表から割愛した。
- 3) 飛騨考古学会旧石器文化会（井上善六・小嶋準一・吉朝則富）・永塚俊司 2001「岐阜県高根村日和田池之原遺跡群の報告（その1）」、2005「岐阜県高山市高根村日和田池ノ原遺跡群の報告（その2）」による。
- 4) 「岐阜県高山市高根村日和田池ノ原遺跡群の報告（その2）」による。
- 5) 長屋幸二氏の御教示による。
- 6) 長屋幸二氏に「今回の調査で出土したナイフ形石器は、出土点数が2点と少なく、小型化が始まるナイフ形石器の後半から終末期にかけての遺物であるといえるが、発掘区全体の時期として「砂川並行期」とは明言はできない。」とご教示頂いた。
- 7) 平井義敏 2015「柳又遺跡A・C地点における石器群と石材利用」『第5回石材のつどい発表資料』による。
- 8) 吉朝則富 2008「飛騨の旧石器文化—研究の現状と課題—」『光記念館研究紀要自然科学第5号』による。

参考文献

- 岩田修 2014「飛騨地方石器石材の分布と流通から見えてくるものー特に下呂石についてー」『東海縄文研究会第11回研究会（岐阜県）資料集』
- 岐阜県 2003『岐阜県史 考古資料』
- 岐阜県文化財保護センター 2016『東野遺跡II』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第136集）
- 岐阜県・宮川村教育委員会 1998『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』
- 下呂町教育委員会 2002『大林遺跡試掘調査報告書』
- 下呂市教育委員会 2015『大林A遺跡発掘調査報告書』（下呂市文化財調査報告書第5集）
- 國學院大學文学部考古学研究室 1990『柳又遺跡A地点』（國學院大學文学部考古学実習報告 第19集）
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2001『寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第35集）
- 高根村 1984『高根村史』
- 竹内誠・大塚勉 1998「III. 美濃帶堆積岩コンプレックス」『地域地質研究報告 木曾福島地域の地質』
- 長野県木曾地方事務所・三岳村教育委員会 2003『小島遺跡』
- 飛騨考古学会旧石器文化会（井上善六・小嶋準一・吉朝則富）・永塚俊司 2001「岐阜県高根村日和田池之原遺跡群の報告（その1）」「飛騨と考古学II』旧石器特集号
- 飛騨考古学会旧石器文化会（井上善六・小嶋準一・吉朝則富）・永塚俊司 2005「岐阜県高山市高根町日和田池ノ原遺跡群の報告（その2）」「石器に学ぶ』（第8号）
- 平井義敏 2015「柳又遺跡A・C地点における石器群と石材利用」『第5回石材のつどい発表資料』
- 明治大学古文化財研究所 2011『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定—基礎データ集〈2〉—』
- 吉朝則富 2008「飛騨の旧石器文化—研究の現状と課題—」『光記念館研究紀要』（自然科学第5号）



発掘区遠景（北から）



調査前風景近景（南東から）



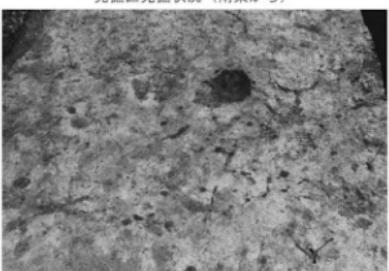
発掘区北壁土層断面（南から）



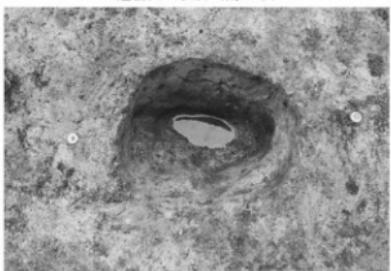
発掘区完掘状況（南東から）



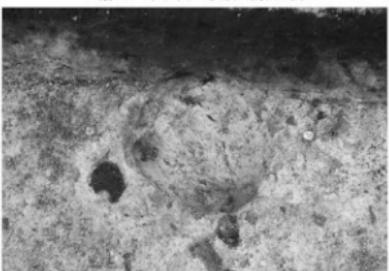
遺物出土状況（南から）



Ⅲ層スコリア出土状況（東から）

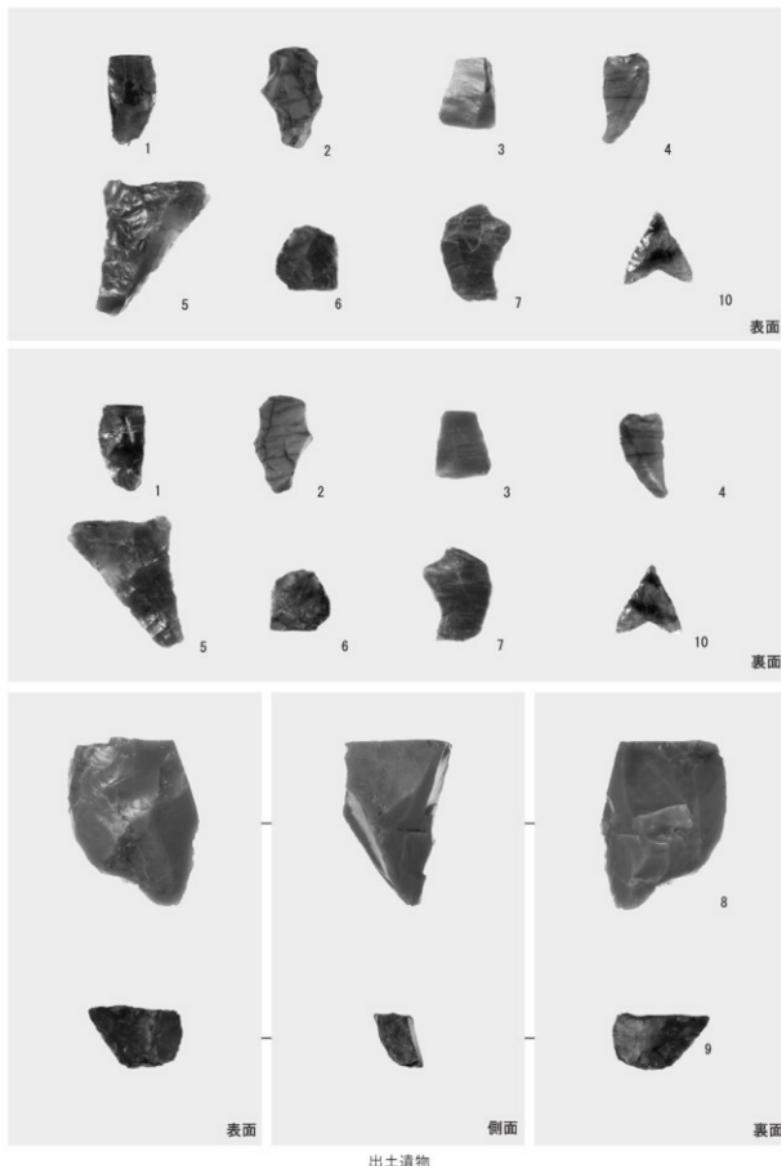


SK 1 完掘状況（西から）



SK 2 完掘状況（西から）

図版2



出土遺物

報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第137集

開拓地B 地点遺跡

2016年10月24日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ